

KARL BÖHM WIENER PHILHARMONIKER

Die Aufnahme in der NHK Hall, Tokyo 1975

BEETHOVEN · WAGNER

J. STRAUSS · BRAHMS · STRAVINSKY



ベーム/ウィーン・フィル, NHKライヴ 1975 II

Karl Böhm/Wiener Philharmoniker • Die Aufnahme in der NHK Hall, Tokyo 1975

Side 1 :

ヨハネス・ブラームス
Johannes Brahms (1833-1897)

交響曲 第1番 ハ短調 作品68(3月17日演奏)
Symphonie Nr.1 c-moll op.68

1. Un poco sostenuto - Allegro
2. Andante sostenuto

Side 2 :

3. Un poco Allegretto e grazioso
4. Adagio - più Andante - Allegro non troppo, ma con brio
ヨハン・シュトラウス
Johann Strauss (1825-1899)

円舞曲《美しく青きドナウ》作品314(3月16日アンコール)
An der schönen blauen Donau, Walzer op.314

Side 3 :

イゴール・ストラヴィンスキー
Igor Stravinsky (1882-1971)

バレエ組曲《火の鳥》(1919) (3月22日演奏)
L'Oiseau de feu, Ballettsuite (1919)

Side 4 :

リヒャルト・ワーグナー
Richard Wagner (1813-1883)

楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》

第1幕への前奏曲(3月19日アンコール)
Die Meistersinger von Nürnberg, Vorspiel zum 1. Aufzug

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
Ludwig van Beethoven (1770-1827)

レオノーレ序曲 第3番 作品72a(3月22日演奏)
Ouverture III zur Oper Leonore op.72a

Side 5 :

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
Ludwig van Beethoven

交響曲 第4番 変ロ長調 作品60(3月16日演奏)
Symphonie Nr.4 B-dur op.60

1. Adagio - Allegro vivace
2. Adagio
3. Menuetto, Allegro vivace - Trio, Un poco meno allegro
4. Allegro ma non troppo

Side 6 :

イゴール・ストラヴィンスキー
Igor Stravinsky

バレエ組曲《火の鳥》(1919) (3月17日演奏)
L'Oiseau de feu, Ballettsuite (1919)

Side 7 :

ヨハン・シュトラウス
Johann Strauss

円舞曲《南国のぼら》作品388(3月25日演奏)
Rosen aus dem Süden, Walzer op.388

アンネン・ポルカ 作品117(3月25日演奏)
Annen Polka op.117

皇帝円舞曲 作品437(3月25日演奏)
Kaiserwalzer op.437

常動曲 作品257(3月25日演奏)
Perpetuum mobile op.257

ヨハン・シュトラウス&ヨーゼフ・シュトラウス
Johann Strauss & Josef Strauss (1827-1870)
ピツィカート・ポルカ(3月25日演奏)
Pizzicato-Polka

Side 8 :

ヨハン・シュトラウス
Johann Strauss

喜歌劇《こうもり》序曲(3月25日演奏)
Ouverture zu "Die Fledermaus"

トリッチ・トラッチ・ポルカ 作品214(3月25日アンコール)
Tritsch-Tratsch-Polka op.214

円舞曲《美しく青きドナウ》作品314(3月17日アンコール)
An der schönen blauen Donau, Walzer op.314

リヒャルト・ワーグナー
Richard Wagner

楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》

第1幕への前奏曲(3月22日アンコール)
Die Meistersinger von Nürnberg, Vorspiel zum 1. Aufzug

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

Wiener Philharmoniker

指揮: カール・ベーム

Dirigent: Karl Böhm

東京NHKホールにおけるライヴ・レコーディング
Konzertmitschnitte in der NHK Hall, Tokyo

データ: 1975年3月16-25日, 東京, NHKホール

録音: 日本放送協会

写真撮影: 武藤 義 (PCC), 乙黒正昭

写真はすべてベーム/VPO来日時に撮影されたものです(解説書P4, 5を除く)

協力: NHKサービス・センター

1975年日本公演日程および演奏曲目 ベーム/ウィーン・フィルハーモニー

3月16日(日)

日本国歌
オーストリア国歌

ベートーヴェン:交響曲 第4番 変ロ長調 作品60

ベートーヴェン:交響曲 第7番 イ長調 作品92

(アンコール)

J.シュトラウス:円舞曲《美しく青きドナウ》作品314

3月17日(月)

ベートーヴェン:レオノーレ序曲 第3番 作品72a

ストラヴィンスキー:バレエ組曲《火の鳥》(1919年版)

ブラームス:交響曲 第1番 ハ短調 作品68

(アンコール)

J.シュトラウス:円舞曲《美しく青きドナウ》作品314

3月19日(水)

シューベルト:交響曲 第8番 ロ短調 D759《未完成》

シューベルト:交響曲 第9番 ハ長調 D944《ザ・グレート》

(アンコール)

ワーグナー:楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》第1幕への前奏曲

3月20日(木)

ベートーヴェン:交響曲 第4番 変ロ長調 作品60

ベートーヴェン:交響曲 第7番 イ長調 作品92

3月22日(土)

ベートーヴェン:レオノーレ序曲 第3番 作品72a

ストラヴィンスキー:バレエ組曲《火の鳥》(1919年版)

ブラームス:交響曲 第1番 ハ短調 作品68

(アンコール)

ワーグナー:楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》第1幕への前奏曲

3月23日(日)

シューベルト:交響曲 第8番 ロ短調 D759《未完成》

シューベルト:交響曲 第9番 ハ長調 D944《ザ・グレート》

3月25日(火)

モーツァルト:交響曲 第41番 ハ長調 K.551《ジュピター》

J.シュトラウス:円舞曲《南国のぼら》作品388

J.シュトラウス:アンネン・ポルカ 作品117

J.シュトラウス:皇帝円舞曲 作品437

J.シュトラウス:常動曲 作品257

ヨハン/ヨーゼフ・シュトラウス:ピツィカート・ポルカ

J.シュトラウス:喜歌劇《こうもり》序曲

(アンコール)

J.シュトラウス:トリッチ・トラッチ・ポルカ 作品214

ワーグナー:楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》第1幕への前奏曲

以上いずれも指揮はカール・ベーム、会場は東京、NHKホール
太字は収録曲目を示します

3月27日(木) 名古屋市民会館

4月1日(火) 広島郵便貯金会館

4月4日(金) 仙台、宮城県民会館

ロッシーニ:歌劇《セミラミデ》序曲

シューベルト:交響曲 第5番 変ロ長調 D485

ドヴォルザーク:交響曲 第9番 ホ短調 作品95《新世界より》

3月28日(金) 大阪、フェスティバル・ホール

ヴィヴァルディ:2つのヴァイオリン、2つのフルート、2つのオーボエ、
2つのクラリネット、ファゴット、弦と通奏低音のための協奏曲
ハ長調 R.556

《聖ロレンツォの祝日のために》

モーツァルト:交響曲 第25番 ト短調 K.183

ブラームス:交響曲 第4番 ホ短調 作品98

3月29日(土) 大阪、フェスティバル・ホール

4月3日(木) 東京、NHKホール

ベートーヴェン:《プロメテウスの創造物》序曲 作品43

ブラームス:ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲 イ短調 作品102

ドヴォルザーク:交響曲 第9番 ホ短調 作品95《新世界より》

3月31日(月) 松山市民会館

4月2日(水) 福岡市民会館

4月6日(日) 札幌、北海道厚生年金会館

ロッシーニ:歌劇《セミラミデ》序曲

シューベルト:交響曲 第5番 変ロ長調 D485

ブラームス:交響曲 第4番 ホ短調 作品98

以上いずれも指揮はリッカルド・ムーティ



ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団メンバー表

このメンバーは1975年来日時に正メンバーとしてウィーン・フィルハーモニーから発表されたものです。

●コンサートマスター Konzertmeister

ゲルハルト・ヘッツェル
Gerhart Hetzel
ライナー・キツピル
Rainer Kuchl
エーリヒ・ビンダー
Erich Binder
ヴェルナー・ヒンク
Werner Hink

●第1 ヴァイオリン I. Violine

ヴォルフガング・ボドゥシュカ
Wolfgang Boduscha
グスタフ・スウォボダ
Gustav Svoboda
アントン・シュトラウカ
Anton Straka
エドゥアルト・ラリシュ
Eduard Larysz
フリッツ・ライターマイア
Fritz Leitmayr
ハンス・ノヴァク
Hans Novak
ゲオルク・ベドリー
Georg Bedy
フリッツ・ケリー
Fritz Kery

アルフレート・シュタール
Alfred Star
アルフレート・ヴェルト
Alfred Welt
ヘルベルト・シュミット
Herbert Schmid
ヘルムート・ブッフラー
Helmut Buchler
ヘルベルト・フリウハフ
Herbert Fruhauf
ベーター・グッツェル
Peter Gotzel
バウル・グッゲンベルガー
Paul Guggenberger
ゲルハルト・リベンスキー
Gerhard Libensky
ヘルベルト・リンケ
Herbert Linke
マンフレート・クーン
Manfred Kuhn
アルフレート・アルテンブルガー
Alfred Altenburger

●第2 ヴァイオリン II. Violine

ヴィルヘルム・ヒューブナー
Wilhelm Hubner
ベーター・グェヒター
Peter Wachter

ハンス・ヴォルフガング・ワイース
Hans Wolfgang Weis
アルフォンス・エッガー
Alfonso Egger
マリオ・バイヤー
Mario Beyer
フランツ・フィッシャー
Franz Fischer
オットー・ネッジジウス
Otto Nessizius
ハンス・クレーシェ
Hans Kresche
アルフレート・シュビラー
Alfred Spiler
ヴァルター・シトゥデノフスキー
Walter Studenovsky
ヨーゼフ・コンドル
Josef Kondor
エルンスト・バルトロメイ
Ernst Bartolomey
ヴィルヘルム・マタイス
Wilhelm Matthes
オルトウィン・オットマイアー
Ortwin Ottmayer
エドウィン・ヴェルナー
Edwin Werner
ハインツ・ハンケ
Heinz Hanke
クリスティアン・ツァローデク
Christian Zalodek

●ヴィオラ Viola

ルドルフ・シュトレック
Rudolf Streng
ヨーゼフ・シュタール
Josef Star
ヘルムート・ヴァイス
Helmut Weiss
ギュンター・ブライテンバッハ
Gunter Breitenbach
クラウス・ハイスタイナー
Klaus Heisterer
ベーター・ペーヒャ
Peter Pechla
ローベルト・ニツチュ
Robert Nitsch
ゲオルク・バタイ
Georg Batay
カール・シュティアーアホフ
Karl Stierhof
バウル・フルスト
Paul Furst
ヴァルター・プロフスキー
Walter Profsky
クルト・アンデルス
Kurt Anders
エルハルト・リッシャウアー
Erhard Litschauer
ギュンター・スコーガン
Gunter Skogkan
ゴットフリート・マルティン
Gottfried Martin

●チェロ Violoncello

ローベルト・シャイヴァイン
Robert Schewen
ヴォルフガング・ヘルツァー
Wolfgang Herzer
フランツ・バルトロメイ
Franz Bartolomey
ディーター・ギュルトラー
Dieter Gütler
フリードリヒ・ドレツァル
Friedrich Dolezal
エーヴァルト・ウィンクラ
Ewald Winkler
ルートヴィヒ・バイナル
Ludwig Beinl
ヴェルナー・レーゼ
Werner Resel
ラインハルト・レップ
Reinhard Rapp
アダルト・スコッチ
Adalbert Skocic
フランツ・クローツァー
Franz Krouzer
ラインホルト・ジューゲル
Reinhold Siegl
ゲルハルト・カウフマン
Gerhard Kaufmann

●コントラバス Kontrabass

ブルクハルト・クロイトラー
Burkhard Kradler
ヘルベルト・マンハルト
Herbert Manhart
ホルスト・ミュンスター
Horst Munster
マルティン・ウンガー
Martin Unger
フランツ・ホルフ
Franz Holub
アルフレート・ブランチアスキー
Alfred Blantysky
フェルディナント・コサーク
Ferdinand Kosak
ヴォルフガング・ゲルナー
Wolfgang Gerner
ラインハルト・デューラー
Reinhard Duerer
ゲルハルト・フォルマーネク
Gerhard Formanek
ミラン・サガート
Milan Sagat
ルドルフ・デーゲン
Rudolf Degen

●ハープ Harfe

ハラルト・カウツキー
Harold Kautsky

●フルート Flöte

ヴェルナー・トリップ
Werner Tripp
ヘルベルト・レズニチェク
Herbert Reznicek
ヴォルフガング・シュルツ
Wolfgang Schütz
ハンス・レズニチェク
Hans Reznicek
ルイス・リヴィエール
Louis Riviere
マインハルト・ニーターマイア
Minhart Nidermayr
ルドルフ・ネクヴァシル
Rudolf Nekvasil

●オーボエ Oboe

カール・マイヤーホーファー
Karl Mayrhofer
ゲルハルト・トゥレチェク
Gerhard Turetschek
ヴァルター・レーマイヤー
Walter Lehmayr
フェルディナント・ラフ
Ferdinand Raab
ギュンター・クロンツ
Gunter Lorenz

●クラリネット Klarinette

アルフレート・プリンツ
Alfred Prinz
ベーター・シュミードル
Peter Schmid
ホルスト・ハーイエク
Horst Hagek
アルフレート・ボスコフスキー
Alfred Boskovsky
ウーリー・クラウゼ
Wili Krause
クリスティアン・クバシュ
Christian Cubasch

●ファゴット Fagott

エルンスト・バンベルル
Ernst Pampert
ディートマル・ツェーマン
Dieter Zeman
カミル・エールベルガー
Camilo Ehrberger
オットー・シーダー
Otto Schneider
フリッツ・ファルトル
Fritz Fallt

●ホルン Horn

ローラント・ベルガー
Roland Berger

ヴォルフガング・トンベック
Wolfgang Tonbeck
ギュンター・ヘーグナー
Gunter Hogner
フォルカー・アルトマン
Volker Altman
ヴィルヘルム・ヤーネジチ
Wilhelm Janeczic
ローラント・バーン
Roland Baar
フランツ・ゼルナー
Franz Söller
ヨーゼフ・ヴェレバ
Josef Veleba
ヨーハン・フィッシャー
Johann Fischer

●トランペット Trompete

アドルフ・ホラー
Adolf Holler
ヴァルター・シンガー
Walter Singer
ヨーゼフ・ボンベルガー
Josef Ponberger
ハンス・アルブレヒト
Hans Albrecht
ヘルムート・ウービツシュ
Helmut Wobisch
ヨーゼフ・ヘル
Josef Hell

●トロンボーン Posaune

ハンス・バウアー
Hans Bauer
ルドルフ・ヨーゼル
Rudolf Josef
ヨーゼフ・ローム
Josef Rothen
エルンスト・シャイト
Ernst Scheit

●チューバ Tuba

ヨーゼフ・フンメル
Josef Hummel

●打楽器 Schlaginstrumente

グスタフ・シュスター
Gustav Schuster
フランツ・プロシェク
Franz Broschek
ホルスト・ベルガー
Horst Berger
ヴォルフガング・シュスター
Wolfgang Schuster
クルト・ブルシーボダ
Kurt Pihoda
フランツ・ザマツァル
Franz Zamazal

ベーム年譜

- 1913 ウィーンでブラームスの友人であり、ウィーン楽友協会の公文書係を務めていたオイゼビウス・マンディチエフスキーに師事して音楽理論を学ぶ。
1917. 3. 18 グラーツでベルンハルト・ブーフビントナーの《彼とその妹》をふって指揮者としてデビュー。
- 1919 法学博士号を得る。
- 1921 カール・ムックのすすめで、ブルーノ・ワルターによりミュンヘン（バイエル国立歌劇場）の指揮者に任じられる。
- 1923 ミュンヘンで彼にとってはじめてのリヒャルト・シュトラウスのオペラ《ナクソス島のアリアドネ》を指揮。
- 1927 ダルムシュタット歌劇場のGMD（音楽総監督）に就任。
歌手テア・リンハルトと結婚。
《ヴォツェック》を指揮した機会に作曲家アルバン・ベルクの知遇を得る。
- 1931 ハンブルク国立歌劇場のオペラ監督に就任。
ウィーン国立歌劇場と初の指揮契約（《トリスタンとイゾルデ》）を指揮。
- 1933 1934年1月付で、ドレスデン国立歌劇場の監督に就任。
リヒャルト・シュトラウスとの長い親交がはじまる（このドレスデン時代に多数のオペラ初演を手がけているが、中でもR.シュトラウスの《無口な女》[1935年6月24日]、《ダフネ》[1938年10月15日]。ベームに献呈された作品）の世界初演は歴史に残るもの）。
- 1935 ドレスデンで「プロフェッサー」の称号を得る。
- 1936 ドレスデン国立歌劇場を率いてロンドン（コヴェント・ガーデン王立歌劇場）にデビュー。
- 1938 《ドン・ジョヴァンニ》を指揮して、ザルツブルク音楽祭に初出演。
- 1941 1943年1月1日付でウィーン国立歌劇場の監督に就任。
- 1944 ウィーン国立歌劇場でのR.シュトラウス80歳の誕生日を祝う歴史的なガラ公演《ナクソス島のアリアドネ》を指揮。この公演はドイツ・グラモフォンによってライヴ録音され、彼にとっての初のオペラ全曲盤となった。
- 1948 《ドン・ジョヴァンニ》を指揮して、ミラノ・スカラ座にデビュー。
- 1949 ウィーン国立歌劇場を率いてパリに客演、《フィガロの結婚》を指揮。
- 1950-53 プエノス・アイレスのテアトロ・コロンのドイツ・オペラ・シーズンの監督を務める。《ヴォツェック》を指揮して、新聞で「アルゼンチン音楽史上の画期的出来ごと」と絶賛される。この折、ビュヒナーによる《ヴォツェック》の台本のスペイン語訳が作られた。
1953. 3. 10 ドイツ・グラモフォンとの初の録音契約。初レコーディングは、ベルリン・フィルハーモニーを指揮しての、ベートーヴェンの交響曲第5番《運命》(MGW5103) だった。



- 1954 9月1日付で二度目のウィーン国立歌劇場監督に就任。
- 1955 11月、戦災から再建されたウィーン国立歌劇場の開場記念公演で《フィデリオ》を指揮。
この年の主な録音：
ベートーヴェン：《ミサ・ソレムニス》ニ長調 作品123
マリア・シュターダー (S)、マリアンナ・ラデフ (A)、アントン・デルモータ (T)、ヨーゼフ・グラインドル (B)、聖ヘトヴィヒ大聖堂聖歌隊、ベルリン・フィルハーモニー
1956. 9. 1 ドイツ・グラモフォンと初の専属契約。
デュッセルドルフのライン・ドイツ・オペラの開場記念公演中の《エレクトラ》を指揮。
- 1957 《ドン・ジョヴァンニ》を指揮して、ニューヨークのメトロポリタン・オペラに初出演。
この年の主な録音：
R.シュトラウス：交響詩《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》作品28
ドレスデン国立管弦楽団
R.シュトラウス：交響詩《英雄の生涯》作品40
ドレスデン国立管弦楽団
初のアステロ録音を行う。
- 1958 この年の主な録音：
R.シュトラウス：交響詩《ツァラトゥストラはかく語りき》作品30
ミシェル・シュヴァルベ (Vn)、ベルリン・フィルハーモニー (MGX7051)
戦後初のオペラ全曲盤：
R.シュトラウス：《ばらの騎士》
マリアンネ・シェヒ (S)、イルムガルト・ゼーフリート (S)、リタ・シュトライト (S)、ディートリッヒ・フィッシャー＝ディエスカウ (Br)、クルト・ペーメ (B)、ドレスデン国立歌劇場合唱団、ドレスデン国立管弦楽団 (MG8086/9)
- 1959 ザルツブルク市からモーツァルト金メダルを贈られる。
- 1960 この年の主な録音：
R.シュトラウス：《エレクトラ》作品58
インゲ・ボルク (S)、マリアンネ・シェヒ (S)、ジーン・マディラ (Ms)、ディートリッヒ・フィッシャー＝ディエスカウ (Br)、フリッツ・ワール (T)、ゲルハルト・ウンガー (T)、ドレスデン国立歌劇場合唱団、ドレスデン国立管弦楽団
- 1962 《トリスタンとイゾルデ》を指揮して、バイロイト音楽祭に初出演。
- 1963 ベルリン・ドイツ・オペラを率いて、東京の日立劇場の開場記念公演《フィデリオ》を指揮。
この年の主な録音：
R.シュトラウス：交響詩《ドン・ファン》作品20、交響詩《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》作品28、祝典前奏曲作品61、楽劇《サロメ》作品54から「サロメの踊り」
ベルリン・フィルハーモニー (MGX7052)
インスブルック冬期オリンピックのオープニングで、R.シュトラウスの《オリンピック賛歌》を指揮。
- 1964 オーストリア大統領から、フランツ・シャルク以来はじめて「オーストリアのGMD（音楽総監督）」の称号を受ける。
ザルツブルクの名譽市民となる。
ドイツ連邦共和国から、功勞十字勲章を受ける。
この年の主な録音：
R.シュトラウス：《ダフネ》作品82
ヒルデ・ギューデン (S)、リタ・シュトライト (S)、ヴェラ・リトル (A)、ジェームズ・キング (T)、フリッツ・ウンターリッヒ (T)、パウ・ル・シェフラー (B)、ハンス・ブラウン (B)、ルートヴィヒ・ヴェルター (B)、ウィーン国立歌劇場合唱団、ウィーン交響楽団

- (テアター・アン・デア・ウィーンでの公演のライヴ録音)
- この年の主な録音：
ベルク：《ヴォツェック》
ディートリッヒ・フィッシャー＝ディエスカウ (Br)、イヴリン・リアー (S)、ヘルムート・メルヒャート (T)、フリッツ・ウンターリッヒ (T)、ゲルハルト・シュトルツェ (T)、クルト・ペーメ (B)、ベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団・合唱団 (MG8090/1)
- この年の主な録音：
ワグナー：《トリスタンとイゾルデ》
ビルギット・ニルソン (S)、クリスタ・ルットヴィヒ (Ms)、ヴォルフガング・ヴィントガッセン (T)、エーバーハルト・ヴェヒター (Br)、クロード・ヒーター (T)、マルティ・タルヴェラ (B)、エルヴィン・ヴォールファルト (T)、ペーター・シュライアー (T)、バイロイト祝祭劇場管弦楽団・合唱団(バイロイト音楽祭でのライヴ録音。リハーサル風景付き。MG8081/5)
- 
- この年の主な録音：
ベルク：《ルル》
イヴリン・リアー (S)、パトリシア・ジョンソン (Ms)、ローレン・ドリスコル (T)、ドナルド・グローブ (T)、ヴァルター・ディックス (Br)、ディートリッヒ・フィッシャー＝ディエスカウ (Br)、ゲルト・フェルトホフ (B)、ヨーゼフ・グラインドル (B)、ベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団
- 《モーツァルト交響曲全集》
ベルリン・フィルハーモニー（この年に全曲の録音を完成。MG8881/95）
- この年の主な録音：
ベートーヴェン：《フィデリオ》作品72
ギネス・ジョーンズ (S)、エディット・マティス (S)、ジェームズ・キング (T)、ペーター・シュライアー (T)、テオ・アダム (B)、フランツ・クラス (B)、マルティ・タルヴェラ (B)、エーバーハルト・ビュヒナー (T)、ギンター・ライプ (B)、ドレスデン国立歌劇場合唱団、ライプツィヒ放送合唱団、ドレスデン国立管弦楽団 (MG8055/7)
- R.シュトラウス：《ナクソス島のアリアドネ》作品60
ヒルデガルト・ヒレブレヒト (S)、タティアナ・トロヤノス (S)、レリ・グリスト (S)、ジェス・トーマス (T)、ディートリッヒ・フィッシャー＝ディエスカウ (Br)、ゲルハルト・ウンガー (T)、バリー・マクダニエル (Br)、バイエルン放送交響楽団 (MG8167/9)
- ハンブルク国立歌劇場で新演出の《サロメ》を指揮。
- 長年の録音活動をたたえの「黄金のグラモフォン」をドイツ・グラモフォンから受ける。
- この年の主な録音：

1970



R. シュトラウス《サロメ》作品54

ギネス・ジョーンズ(S)、ミニョン・ダン(Ms)、
ディートリッヒ・フィッシャー＝ディエスカウ
(Br)、ウエスワフ・オフマン(T)、ハンス・
ゾーティン(T)、リチャード・カシリー(T)、
クルト・モル(B)、ハインツ・アランゲンブル
ク(B)、ハンブルク国立歌劇場管弦楽団(ハン
ブルク国立歌劇場での新演出初日のライヴ録音。
MG8031/2)

1970-71

この年の主な録音:

《ベートーヴェン交響曲全集》

ギネス・ジョーンズ(S)、タティアナ・トロ
ヤノス(A)、ジェス・トーマス(T)、カール・
リッターブッシュ(B)、ウィーン国立歌劇場合
唱団、ウィーン・フィルハーモニー (MG 8914
/21)

1971

ウィーン・フィルハーモニーを率いて、モスクワ
に初の演奏旅行、ベートーヴェンの第9交響曲を
指揮。

この年の主な録音:

《シューベルト交響曲全集》

ベルリン・フィルハーモニー (この年に全曲の
録音を完成。MG8909/13)

R. シュトラウス:《カプリッチョ》作品85

アリン・オジェ(S)、グンドラ・ヤノフ
ウィツ(S)、タティアナ・トロヤノス(S)、
ペーター・シュライアー(T)、アントン・デ・
リッター(T)、ディートリッヒ・フィッシャー
＝ディエスカウ(Br)、ヘルマン・ブライ(Br)、
カール・リッターブッシュ(B)、バイエルン放
送交響楽団 (MG8170/2)

ワグナー:《さまよえるオランダ人》

ギネス・ジョーンズ(S)、ジークリンデ・ヴァ
ーグナー(Ms)、ヘルミン・エッサー(T)、ハラ
ルト・エク(T)、トマス・スチュアート(Br)、
カール・リッターブッシュ(B)、バイロイト祝
祭劇場管弦楽団・合唱団(バイロイト音楽
祭でのライヴ録音。MG 8040/2)

1971-72

この年の主な録音:

J. シュトラウス 2世: 皇帝円舞曲作品437、ワルツ
《南国のバラ》作品388、ワルツ《美しく青きドナ
ウ》作品314、トリッチ・トラッチ・ポルカ作品214、
ポルカ《雷鳴と電光》作品324、アンネン・ポルカ
作品117、常曲作品257、ピチカート・ポルカ(ヨ
ーゼフ・シュトラウスとの合作)

ウィーン・フィルハーモニー (MG 2396)

1974

オーストリアの教育芸術大臣から、若い指揮者の
ための「カール・ベーム賞」制定が発表される。
ベーム自身が「ベーム＝ニキシュ賞」を設けるこ
とを発表。

ハンブルク国立フィルハーモニーの名譽指揮者とな
る。

ザルツブルク音楽祭でオペラ全曲をはじめてライ
ヴ録音 / モーツァルト:《コシ・ファン・トゥッ
テ》(MG 8065/7)

この年の主な録音:

ベートーヴェン:《ミサ・ソレムニス》二長調 作
品123

マーガレット・ブライス(S)、クリスタ・ルー
トウィヒ(A)、ウエスワフ・オフマン(T)、
マルティ・タルヴェラ(B)、ウィーン国立歌劇
場合唱団、ウィーン・フィルハーモニー (MG
8053/4)

1975

この年の主な録音:

《ブラームス交響曲全集》

ウィーン・フィルハーモニー (MG8194/7)
ベーム、ウィーン・フィルハーモニーにR. シュ
トラウスの《ナクソス島のアリアドネ》、《影のない
女》のスケッチ・ブックを贈呈。

1976

この年の主な録音:

ベートーヴェン:ピアノ協奏曲 第4番 ト長調 作
品58

マウリツィオ・ボリーニ(Pf)、ウィーン・フィ
ルハーモニー (MG1050)

ブルックナー:交響曲 第7番 小長調、同第8番
ハ短調

ウィーン・フィルハーモニー (MG8235/7)

モーツァルト:交響曲 第40番 ト短調 K.550、同
第41番 ハ長調 K.551

ウィーン・フィルハーモニー
(後期交響曲集をめざしての新録音。MG1051)

R. シュトラウス:交響詩《英雄の生涯》作品40

ゲルハルト・ヘッツェル(Vn)、ウィーン・フィ
ルハーモニー (MG1052)

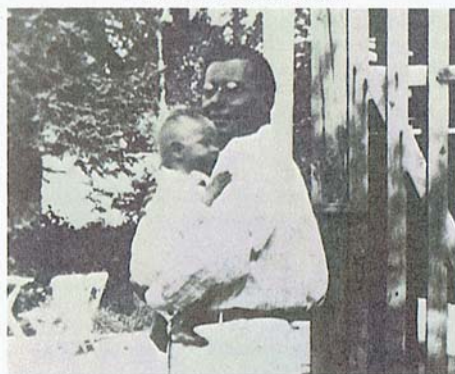
1977. 1. 1

1977

ボリドル・インターナショナルと終身専属契約。
ウィーン・フィルハーモニーを率いて3度目の来
日。

ロンドン交響楽団の名譽会長となる。

1936年にドレスデン国立歌劇場を率いての公演以
来はじめて、コヴェント・ガーデン王立歌劇場に
出演、《フィガロの結婚》を指揮。



この年の主な録音:

ベートーヴェン:ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 作
品37

マウリツィオ・ボリーニ(Pf)、ウィーン・フィ
ルハーモニー (MG1189)

チャイコフスキー:交響曲 第4番 ハ短調 作品36

ロンドン交響楽団 (MG1178)

1978

バイエルン国立歌劇場の名譽指揮者となる。

ウィーンの名譽市民となる。

1978. 8

ザルツブルク音楽祭出演40年を祝う。
これまでに同音楽祭で52回のオーケストラ・コン
サート、270回のオペラ公演を指揮したことになり、
そのうち168回はモーツァルトのオペラだった。

この年の主な録音:

ベートーヴェン:ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調

作品73《皇帝》

マウリツィオ・ボリーニ(Pf)、ウィーン・フィ
ルハーモニー (MG1235)

チャイコフスキー:交響曲 第6番 ロ短調 作品74
《悲愴》

ロンドン交響楽団 (MG1226)

1979

ドレスデンでの《皇帝ティートの慈悲》(MG8382
/4)の録音で、ドイツ・グラモフォンでのモー
ツァルト・オペラ・シリーズを完結。

1979. 8. 28

85歳の誕生日。ザルツブルク音楽祭で新演出によ
るガラ公演で《ナクソス島のアリアドネ》を指揮。
バイエルン国立歌劇場の名譽会員となる。
ウィーン・フィルハーモニーのワシントン公演初
日で、シュベールの交響曲第9番を指揮。

この年の主な録音:

ブラームス:ピアノ協奏曲 第1番 二短調 作品15

マウリツィオ・ボリーニ(Pf)、ウィーン・フィ
ルハーモニー (28MG0006)

モーツァルト:《皇帝ティートの慈悲》K.621

テレサ・ベルガンサ(S)、エディット・マティス
(S)、マルガ・シムル(S)、ユリア・ヴァラデ
イ(S)、テオ・アダム(B)、ペーター・シュ
ライアー(T)、ライプツィヒ放送合唱団、ドレ
スデン国立管弦楽団(1964年の《魔笛》ではじ
まったモーツァルト7大オペラ最後の録音。M
G8382/4)

1980

ウィーン国立歌劇場を率いて来日。
ダルムシュタット国立劇場の名譽会員となる。

この年の主な録音:

チャイコフスキー:交響曲 第5番 小短調 作品64

ロンドン交響楽団(初のデジタル録音。28MG
0053)

1980. 11

ベーム最後の録音:

ベートーヴェン:交響曲 第9番 二短調 作品125
《合唱》

ジェシー・ノーマン(S)、ブリギッテ・ファス
ベンダー(A)、ブラシド・ドミンゴ(T)、ヴァ
ルター・ベリー(Br)、ウィーン国立歌劇場合唱
団、ウィーン・フィルハーモニー
(最後の録音。デジタル録音)(46MG0208/9)

1981. 8. 14

ザルツブルク郊外の自宅で死去。

ベームはそのレコード録音で合計64のレコード賞を受けている。

その他の名譽:

ザルツブルク州名譽勲位。ウィーン・フィルハーモニー名譽指揮者。
ドイツ連邦共和国功勞勲位。ハンブルク市ブラームス銀メダル。レ
コードを通じてのクラシック音楽の普及に對しての名譽学位。ウィ
ーン、バイロイト、グラーツの各都市からの名譽リング。ウィーン・
フィルハーモニーからの名譽リング。ウィーン・フィルハーモニー
名譽会員。ウィーン・コンツェルトハウス協会名譽会員。ベルリ
ン・ドイツ・オペラ名譽会員。



楽曲解説

葦科雅美

交響曲 第1番 ハ短調 作品68 (ブラームス)

作曲 1876年9月、バーデン＝リヒテンシュタインにて。ブラームスは「ベートーヴェンの9曲の交響曲があるのに、どうしてこのうえ交響曲の必要があるのだろうか」との懐疑をいなく、ワーグナーやリストからすでに死物化した音楽形式と目されていた交響曲を、新しい時代に立派にふみかえらせたいという使命感にもかき立てられた。「交響曲第1番」はそのような心境にあったブラームスが、21年間ものながい歳月におたる試行錯誤の末によりやく悲願を達成した作品で、1862年夏ミュンスター・アム・シュタイン滞在中に書き上げられた第1楽章には、まだ現在のもののような緩やかな序奏は見られなかった。ブラームスが本格的にこの交響曲に没頭したのは1874年ごろからで、前年《大学祝曲》を作曲して管弦楽の扱いに自信を深めたことがその原動力になったものとも推察されている。その後スイスのチューリッヒ湖畔のリュシュリンコン、西ドイツのハッデルベルクに近いネッカー河畔のツィーゲルハウゼン、バルト海のリュエグ島にある海岸町ザスニッツなどで稿を進め、クララ・シューマンの住居のあるバーデン＝バーデン近くのリヒテンシュタールで最後の仕上げがほどこされた。初演 1876年11月4日、カールスルーエの宮廷劇場にて、オットー・デッソフの指揮による。ウィーン初演は同年12月17日ブラームス自身の指揮でおこなわれたが、彼はその前に楽曲の細部に修正を加え、またクラリネットをB管に変更した。

指揮者・ピアニストとして有名なハンス・フォン・ビューローはこの曲を、ベートーヴェンの不滅の9曲を受けつぐ作品という意味で「第10番」と呼んだ。それは正しい。しかしこの曲は、古典主義に基盤をおきながらも、ロマン主義を高らかに歌いあげた新しいタイプの交響曲で、本質的にはベートーヴェンの交響曲とまったく別個の作品である——

第1楽章 ウン・ボコ・ソステヌート (ハ短調、8分の6拍子)——アレグロ (ハ短調、8分の6拍子、ソナタ形式) は、最初の37小節からなる序奏部に、つづく楽章主部の主要な動機がすべてふまれている。

第2楽章 アンダンテ・ソステヌート (ホ長調、4分の3拍子、3部形式) は、ブラームスが得意にした静謐な抒情美にとむ緩徐楽章で、哀愁を秘めており、第3部の独奏ヴァイオリンの効果も印象深い。

第3楽章 ウン・ボコ・アレグレット・エ・グラチオーソ (変イ長調、4分の2拍子、3部形式) は、ブラームス特有の素材で親しみやすいロマン風の楽章で、彼はつづく二つの交響曲でもこのような抒情的なアレグレットをメヌエットやスケルツォの替りに挿入している。中間部はロ長調、8分の6拍子になって、管と弦の応答で運命的な動機をあつかう。

第4楽章 アダージョ (ハ短調、4分の4拍子)——アレグロ・ノン・トロppo・マ・コン・ブリオ (ハ長調、4分の4拍子、自由なソナタ形式) は、第1楽章とおなじく重要な動機を網羅する大規模な序奏部が初めに置かれていて、それがアダージョからビツ・アンダンテ (ハ長調) に変わると、ホルンが有名な旋律をのびのびと吹奏する。つづく楽章主部は、ベートーヴェンの「第9」の終末合唱の主題に似た弦楽器の総奏で始まり、最後はビツ・アレグロ (2分の2拍子) にテンポを速めて、歓喜の絶頂で全曲を終結する。

円舞曲 《美しく青きドナウ》作品314 (ヨハン・シュトラウス)

オーストリアは1866年ケーニヒグレイツの戦いで宿敵プロシヤに手痛い敗北を喫し、誇り高いウィーンの人びとは、敗戦のショックで気分が沈みがちであった。翌年、ヨハン・シュトラウスは、ウィーン男声合唱協会の指揮者ヨハン・ヘルベック(後にオーストリア宮廷歌劇場、現ウィーン国立歌劇場の音楽監督になった)から合唱ワルツの作曲の依頼を受けた。彼は、声楽つきのワルツをまだ一度も作曲したことがなかったのに、セッ

かくの申し出を謝辞したが、ヘルベックから「このような悲しい時世にこそ、ウィーンの市民の心に希望の灯をともしワルツが必要なのだ」と説得されて、作曲の決心をした。シュトラウスはドイツの有名な詩人カール・イシドール・ベックの「ドナウ、美しく青きドナウのほとり」という句で結ばれる詩を思い出し、それを口ずさむうちに、ニ長調の上行する3和音にもとづく32小節のメロディーが湧き上がってきた。彼はそれを主旋律とし、ベックの詩の最後の句を題名にしたワルツ《美しく青きドナウ》を書きあげて、ヘルベックに手渡した。

しかし1867年の謝肉祭のさなかであった2月13日に、ウィーン帝室騎馬学校のバロック風の大ホールで、ヘルベック自身ではなくルドルフ・ヴァインツルムの指揮するウィーン男声合唱協会の合唱団と、シュトラウスの弟ヨーゼフとエドゥアルトの二人が兄に代って統率したオーケストラによって初演された《美しく青きドナウ》は、アンコールが1回だけ求められたというていどの成果に止まった。それはワルツ王の日常の演奏会に照らすと、成功というには遙かに遠い状態であった。主要な原因は、この合唱協会所属の詩人ヨーゼフ・ヴァイルの書いたテキストがシュトラウスの音楽のロマン性とはまったく裏腹な土気高揚型の内容で、しかも歌いにくく非旋律的なものであったためとされている。

音楽の都ウィーンのシンボル、そしてオーストリアの第2の国歌とも讃えられるこの円舞曲は、奇妙なめぐりあわせであるが、ウィーン初演の数ヵ月後に、フランスの首都パリで最初の大成功を記録した。1867年夏のパリで万国博が開催され、シュトラウスはワルツ王の熱心な礼讃者であったフランスの貴族オズモンド伯爵の招待で博覧会を見物した。それを機会にフランスの大新聞「ル・フィガロ」が全社をあげてワルツ王のキャンペーンに乗り出し、同社の主催でシュトラウスの演奏会が開催され、《美しく青きドナウ》はそのコンサートで熱狂的な喝采を浴びて、フランスの最も有力な音楽批評家から「ワルツの中のワルツ」とまで敬賞された。オッフェンバックの歌劇《ホフマン物語》の台本作家ジュール・バルビエがこのワルツのためにフランス語の見事なテキストを書いてくれたことも、同曲がパリの人びとの人気に投じな要因の一つであった。《美しく青きドナウ》はこの後ロンドンでも圧倒的な成功をおさめ、やがて本家本元のウィーンで、また広くオーストリア全土で同じようにベスト・セラー的な人気を博し、欧米の全好楽家の愛好曲となった。当時のウィーンの大音楽評論家ハンスリッヒは、オーケストラだけの演奏による同曲を「歌詞を持たない愛国的な民謡、祖国オーストリアの讃歌、平和なマルセイエーズ (フランスの革命歌、のちに同国の国歌)」と礼讃した。現在もこの曲は歌詞なしで、つまりオーケストラだけで演奏されるのが通常であり、ヨハン・シュトラウスのワルツの代表作として知られているのである。

ちなみにこの曲は、「序奏」(アンダンティーノ・テンポ・デ・ヴィ・ヴァルス)と、それにづく「5つのワルツ」と「後奏」で構成されており、まさに一編の音詩というべき内容をそなえている。

バレエ組曲《火の鳥》(1919年版) (ストラヴィンスキー)

作曲と初演 ストラヴィンスキーによるディアギレフのロシア舞踊団のためのバレエ第1作《火の鳥》(仏 L'oiseau de feu、英 The fire bird)は、1909年11月から翌年5月にかけてベテルスブルク (現レニングラード) で作曲され、1910年6月25日パリのオペラ座で、その前年ロシアの有名な興業師ディアギレフが結成したロシア舞踊団によって初演された。指揮はガブリエル・ビエルネ、振付はミシェル・フォーキン。なお楽曲はリムスキー＝コルサコフに献呈された。

1919年版 《火の鳥》はオリジナルのバレエ全曲のほかに、ストラヴィンスキー自身によって「演奏会用」の3種のエディションが作られている。第1の「1911年版」は交響組曲と呼ばれるもので、その楽器編成は原曲どおりの4管編成になっている。第2の「1919年版」は演奏会用組曲と題されており、それがこのレコードの演奏譜でもあるが、オーケストレーションは2管編成(木管2、2、2、2、——金管4、2、3、1、——打楽

器——ハープ、ピアノ——弦5部)に縮小されている。第3の「1947年版」は第2のものと同じ2管編成だが、曲数はこれよりも多く、1950年バランシンの振付でニューヨーク・シティ・バレエ団によりバレエとしても上演された。しかし演奏会用のバレエ組曲としては「1919年版」がもっとも名高く、下記の連続する五つの部分からなっている——

1. 序奏—火の鳥とその踊り—火の鳥のヴァリアシオン
2. 王女たちのロンド (ホロヴォード舞曲)
3. カッチェイ王の魔の踊り
4. 子守歌
5. 終曲

《火の鳥》の物語はロシアの古い民話によるもので、「火の鳥」とは超自然界の善良な妖精であり、緑色の爪をもつ「魔王カッチェイ」は悪魔の象徴である。彼の王国に立入る人間は、魔法によって、女は閉ざされ男は石に妻えられる。この悪魔は不死だが、秘密の小箱の中に入れてある卵の形をした彼の魂がこわされると、魔力を失って破滅する。ストラヴィンスキーは、超自然界に属する火の鳥やカッチェイと、悪魔と戦うイワン王子や彼が救出する王女たち、つまり自然界の人間とを、音楽的にどのように区別して表現すればよいかという点に苦慮したという。彼は解決のいと口を、恩師でもあり親しい友でもあったリムスキー＝コルサコフのオペラ《金鶏》に見出して、このロシア風の旋律と管弦楽のきらめく色彩美と現代的なリズム感が楽曲をみずき高貴なバレエ曲を書き上げたのであった。「1919年版」は——

①最初に弱音器をつけた低音弦が太鼓の弱い連打を伴って、8分の12拍子のゆるやかに蛇行する音型を奏する。この動機は超自然界を暗示するもので、不死のカッチェイとその手下の妖怪たちや火の鳥の出現の際に、さまざまな形で再現する。この「序奏」(※バレエ全曲の第1曲)のあとに、黄金のリングがたわわに実るカッチェイ王の魔法の庭園(※第2曲)と、火の鳥がイワン王子に追われてそこに妻を現わす場面の音楽(※第3曲)の断片がつづき、次いで火の鳥の踊り(※第4曲)がきらびやかに展開される。

②これはカッチェイのため捕われの身になっている13人の乙女たちが、黄金のリングを手にとって優雅に踊る場面の音楽(※第10曲)で、このホロヴォード Khorovod というロシア舞曲の主題は、名高いロシア民謡《庭園にて》から採られている。イワン王子は、踊りたわむれる彼女たちの中でひととき美しいツァレヴナ王女から身上話を聞いて、麗わしい姫を救い出す決心をする。

③王子はカッチェイの手下の者どもに捕われて、魔王の呪文で石に化身されそうになる。彼は、逃がしてやった火の鳥がお礼にくれた羽毛のことを思い出して、それを振ると、火の鳥が飛んで来る。そして魔王と妖怪どもに魔法をかけて、いつまでも踊りつづかせさせる。これはその荒々しい舞踏の音楽(※第16曲)である。

④彼等が踊りつかれて倒れると、火の鳥は子守歌を歌ってカッチェイたちを眠らせる。その間に王子は魔王の魂が入っている卵を探し出す。(※第17曲と第18曲の冒頭の6小節)

⑤卵が割られてカッチェイは滅び、平和がよみがえる。曲は歓喜のしらべになって、そのクライマックスで終結する。(第18曲)

上記の中、③～⑤は切れ目なくつづけて演奏され、それ以前の部分にもながい区切り(休止)は置かれていない。

楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》第1幕への前奏曲 (ワーグナー)

作曲 1862年11月。楽劇全体は、1862年に亡命中のバリでワーグナー自身台本を書き上げ、作曲に着手したが、完成はすっとおくれで1867年10月スイスのルツェルン近郊のトリブシェンであった。

初演 1862年末、ライプツィヒにて。楽劇全体の初演は1868年6月、ミュンヘンでおこなわれた。

15～6世紀のドイツ（神聖ローマ帝国）の職人組合の詩歌に秀でた親方（マイスター・ジンガー）たちの歌合戦を題材とする3章の楽劇の最初の前奏曲は、ハ長調で始まり、力強い「マイスター・ジンガーの動機」に、騎士ワルターとその恋人エヴァの「愛の情景の動機」がつづき、さらに「行動の動機」「芸術の動機」その他のさまざまなライト・モティーフの登場と反復によって構成されている。ワーグナーはこの楽劇では珍しくもそれらを対位法的手法をもって処理して、立体感と華やかで堂々とした雰囲気をつまみに盛り立てている。

レオノーレ序曲 第3番 作品72b（ベートーヴェン）

作曲 1806年1月。ベートーヴェンの唯一の歌劇《フィデリオ》（最初は《レオノーレ》と題されていた）は、1805年11月ウィーンのアン・デア・ヴィーン劇場で初演されたが、翌1806年に改作がおこなわれ、さらにその8年後にも大々的な改訂がほどこされた。《レオノーレ序曲第3番》は、ベートーヴェンが前後4回作曲したこのオペラのための「序曲」中の3つ目にあたるもので、もっとも名高い。

初演 1806年3月29日、アン・デア・ヴィーン劇場における《フィデリオ》第2版の上演に際して、イグナツ・フォン・ザイフリートの指揮でおこなわれた。

歌劇《フィデリオ》のための4つの序曲、つまり《レオノーレ序曲》（第1～3番）と最後に作曲された《フィデリオ序曲》はそれぞれすぐれているが、《レオノーレ第3番》はこのオペラの第1版の初演の際に演奏された「第2番」（第1番は使用されなかった）にかなり似かよっており、アダージョ（ハ長調、4分の3拍子）の序奏に始まる。これにソナタ形式をとるアレグロ（ハ長調、2分の2拍子）がつづくが、展開部の終りに、悪徳の刑務所長を裁く司法大臣の到着を告げるトランペットのファンファーレと共に反復される。その後第1、第2主題が再現し、力強いコーダが熱狂的に曲を終結へとみちびく。

《レオノーレ序曲第3番》は、1814年ウィーン会議のさなかにケルトナートール劇場で初演された《フィデリオ》第3版のための序曲（フィデリオ序曲）が、劇場の開幕の音楽にふさわしく簡潔につくられているのとは対照的に、それ自体がオペラの劇的内容を要約して物語るほどに雄弁な、むしろ交響詩に近い楽曲となっている。そのため演奏会用序曲として単独に採り上げられることが多く、オペラに使用される場合にも「序曲」としてではなく、大詰めの第2幕・第2場の前か、第1幕と第2幕の間に挿入されるのが通常である。

交響曲 第4番 変ロ長調 作品60（ベートーヴェン）

作曲 1806年秋。上シレジア地方（現ポーランド）オーバー＝グロガウのバロック風の城館を居住地にしていた音楽好きの貴族フランツ・フォン・オッパースドルフ伯爵は、血縁にあたるリヒノフスキー侯爵のウィーンの宮殿を訪れたとき、ベートーヴェンと知りあって、彼自身その楽員もつとめる自分の宮廷オーケストラのための作曲を依頼した。《交響曲第4番》はこのシレジアの領主の求めに応じてその人に献呈された作品であるが、最初からそのつもりで作曲されたのではなく、楽曲の成立には、ベートーヴェンの「不滅の愛人」の最も有力な候補者とされるテレゼ・フォン・ブルンスヴィク伯爵令嬢との婚約（1806年5月）が重要な要素になっているものと考えられている。

初演 1807年3月、作曲家自身の指揮により、ウィーンのロバコヴィッツ邸にて。

《英雄》（交響曲第3番）の2年半ほど後、「傑作の森」と呼ばれるベートーヴェンの最盛期に、次の《運命》（第5番）とはちがっておそらくは短期間に書き上げられた《第4番》は、結局は悲しい破綻におわるテレゼ嬢との婚約の喜びを楽聖が心底から表明した明るく健康な幸福感にみちた作品で、「二人の北国の神話の巨人（エロイカと英雄）に捧まれて立つ清純なギリシ

ヤの乙女」というシューマンの批評は名高い。古典的な均整美の中に抑鬱的に溢れ出るロマン的な詩情を宿すこの曲は、その内側にベートーヴェン独自の壮大な想念がかくされており、造型的な意志の強さが全曲をつらぬいて 完成度の高さは楽聖の全9曲の交響曲中のどれにも劣らないものがある。外形上はひとつ前の《英雄》以前に逆行しているように見えながら、実際にはそうした感想がまったくないの検査事といえる内面的な充実と新しさをもつ作品であり、聞けばきくほどに感興の高まる「くろうと（玄人）好みの楽曲」ともされている。

第1楽章 アダージョ（変ロ短調、4分の4拍子）——アレグロ・ヴィヴァーチェ（変ロ長調、2分の2拍子、ソナタ形式）は、ロマン的な、夢みするような序奏に始まって、その中で示された音型が、つづく楽章主部の第1主題に登場する。単純な分散和音にもつづくその主題は経過部の後にもういちど姿を現わし、やがて木管に可憐な第2主題が出て、さらにクラリネットとファゴットが模倣的に奏する第3主題へと導かれる。展開部は主として第1主題を扱い、ほぼ公式とおりの再現部がそれにづく。

第2楽章 アダージョ（変ホ長調、4分の3拍子、展開部を欠くソナタ形式）は、ベートーヴェンが書いたもっとも甘美で情緒的な緩徐楽章であると共に、後期の作品の特徴である「考えるアダージョ」の前ぶれとも認められている。二つの主題をもち、再現部は展開部風に処理される。

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ（変ロ長調、4分の3拍子、混合3部形式）は、スケルツォとは明記されていないが、内容は明らかにスケルツォで、トリオが2回反復される。

第4楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo（変ロ長調、4分の2拍子、ソナタ形式）は、常動曲ふうの楽想と優雅な旋律によってつらぬかれるフィナーレ。そのため軽快な印象をあたえるが、内容的には重厚かつ緻密に形づくられており、中期のベートーヴェンらしいもりあがりを持つ。再現部は拡大されている。

円舞曲《南国のばら》作品388（ヨハン・シュトラウス）

オペレッタ《女王のレースのハンカチーフ》（Das Spitzentuch der Königin）の中の美しい旋律をあつめて作りあげられたワルツ。ヨハン・シュトラウスのそのオペレッタ（第7作目）は、ポルトガル王の若い王の権力を封じ込めようとする宰相の陰謀が、聡明な王妃と忠臣セルバンテスのはからいでくつがえされるといふ筋で、1880年10月1日アン・デア・ヴィーン劇場で初演された。評判はまずまずという程度であったが、イタリア王ウンベルト1世（在位1878～1900）はこのオペレッタが大変気に入った。ワルツ王シュトラウスはそのことを知り、即座にこのワルツを編曲して王に献呈したのであった。「南国のばら」（Rosen aus dem Süden）という曲名の由来は詳らかでないが、旋律の美しさと晩年のシュトラウスの円熟した作曲技法によって、これは彼のもっともすぐれた円舞曲のひとつになっている。

なお原作のオペレッタに登場するセルバンテスとは、有名な『ドン・キホーテ』の作者であるスペインの小説家ともいわれるので、ポルトガルではなくスペインの物語とも考えられる。しかし史実的には根拠のない喜歌劇の台本であるのだから、深くせんざくする必要はないだろう。

アンネン・ポルカ 作品117（ヨハン・シュトラウス）

これはワルツ王によるエレガントなフランス風ポルカ（Polka-Française）の代表作のひとつで、グラーツのアンネンザールという舞踏場のために、彼がまだ20歳代の半ばであった1852年ごろ作曲された。《アンネン・ポルカ》（Annen-Polka）という曲名はそれに由来するものだが、シュトラウスは1852年5月ウィーンの王宮内で公爵夫人の一人からこの曲の演奏を所望され、それが契機になって、宮廷舞踏会でもときおり指揮をするようになった。なおこれと同じ名の曲を父ヨハン・シュトラウスも作曲しているが、それはウィーンに古くから伝わる聖アンナの祝日を記念して作曲されたものとも、あるいは彼の妻のアンナのために作曲されたものともいわれている。父と子の同名の楽曲はしばしば混同されるが、いっそう名高いのは息子のこのポルカである。

皇帝円舞曲 作品437（ヨハン・シュトラウス）

《皇帝円舞曲》（Kaiser-Walzer）という曲名は、ブラームスやドヴォルザークともゆかりの深いドイツの楽譜出版社ジムロックの3代目の当主フリッツ・ジムロックが名付けたもので、初版の楽譜には、献呈者の名こそなかったが、その最初のページにオーストリアの王冠が刻印されていた。そのためこの曲は、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世の在位40周年の祝宴が1888年12月2日にウィーンで開催されたとき、その宮廷舞踏会のために作曲されたものといえられてきた。しかし最近の研究によると、この曲の初演は、その祝賀の行事の10ヵ月ほど後におこなわれたものである。とはいっても、ワルツ王ヨハン・シュトラウスの最高の傑作の一つとされるこの円舞曲が、皇帝フランツ・ヨーゼフ1世をことばいで作曲されたことは、通説どおりの、疑うべくもない事実と考えられるのである。

1848年のウィーン動乱の後を受けて帝位についたフランツ・ヨーゼフ1世の治世（第1次大戦中の1916年まで）は、多事多難な国事に終始したが、即位40年祝典後、私生活の上でも皇帝には恐るべき不幸があいついで見舞った。暗れの日影の敷設間後の1889年1月29日に、一人息子であった世嗣ぎのルーデルフ大公が、ウィーンの森の西南部に位置するマイヤーリンク村の狩りの館の寝室で、愛人マリー・ヴェツェルタと共に自らの命を断ったのである。これが皇帝の晩年の連続的な悲劇の始まりであった。

一方ヨハン・シュトラウスは若いころ、体制派であった父ヨハン・シュトラウスに拒まれて、1848年のウィーン動乱の際に《革命行進曲》を作曲し、武力蜂起した民衆の前で《ラ・マルセイーズ》を演奏するなどの行為をした。彼はそのためフェルディナント1世のあとを継いだ皇帝フランツ・ヨーゼフ1世からうとんじられて、ずっと後の1863年まで、ウィーンの宮廷舞踏楽師長の位につくことができなかった。しかし晩年のシュトラウスは、オーストリア皇帝に対して父と同様の深い忠誠心をいだき、同国の民衆もまたフランツ・ヨーゼフ1世にたいなる敬愛の情を寄せていたのである。

《皇帝円舞曲》は、皇太子の薨死によっていっそう孤独な性格を強めた皇帝（ときに59歳）を諷刺して作曲されたものであることは、テンポ・ディ・マルチア（行進曲のテンポで）に始まる序奏部の荘重で華やかなしらべによって、すぐさま実感できることだろう。モーツァルトの歌劇《コシ・ファン・トゥッテ》の中の〈士官たちの行進〉のメロディーをはのかに思い起こさせるこの長大な美しい序奏の後に、テンポ・ディ・ヴァルスの経過部を経て、ペン・レガート・エド・エスプレッシーヴォ（レガートで表情ゆたかに）と指示されている〈ワルツ第1〉が始まる。つづいて同じく2部形式あるいは3部形式をとる〈第2〉、〈第3〉、〈第4〉のワルツが新しい主題によって展開され、既出の旋律が回想されるコーダ（後奏）で曲は結ばれる。このような構成（ワルツの数は不定）が、ヨハン・シュトラウスを代表者とするウィンナ・ワルツの定型なのである。

常動曲 作品257（ヨハン・シュトラウス）

この軽快なスケルツォは、指揮者が声や身振りで終わりを告げるまで、演奏をいつまでもつづけることができるように作られている。原題の「ペルペトゥム・モービレ」（Perpetuum mobile）とは、中世の科学者が夢想した永遠にエネルギーを喪失しない無限動力のことだが、ヨハン・シュトラウスの生前のウィーンは産業革命の真最中であった時代で、「無限の動き」という意味のこの言葉は当時の流行語になっていた。長足の進歩をとげた蒸気機関を見て感心したワルツ王は、それにインスピレーションを得て、この無限に演奏できるユーモラスな曲を作曲（1862年）し、「音楽の冗談」（Musikalischer Scherz）と題して祝に入っていたということである。

ピツィカート・ポルカ（第ヨーゼフとの合作）

《アンネン・ポルカ》と同様のフランスふうポルカ。題名のとおりピツィカート奏法によった弦楽合奏曲で、「常にピツィカートでピアノシモを大いにかかせて」という指定をもち、そのいたずらっぽく、しゃれた感じがきわめて魅力的である。ヨハン

のすぐ下の弟ヨーゼフ・シュトラウス（1827—1870）は、音楽家よりは技師、とくに建築家になりたいと望んでいた。詩人でもあり、画家でもあり、音楽はクラシックを愛好した。しかし、神風タレントのように多忙な兄を助けるためとその熱意にひかれて、結局は兄弟そろって同じ道を歩むことになった。《ビツィカート・ポルカ》のような小さい曲を、性格がちがうためあって仲がよかったといわれる2人が、どのような分担で合作したのか、あれこれと想像してみるのも楽しいことである。

なおこの曲は、旅先きのロシアで作曲されてから34年後の1893年に、ワルツ王ヨハンのオペレッタ《公妃ニネッタ》の挿入曲に使われていっそう有名になったが、そのときすでに弟のヨーゼフは神の国に召されていた。ワルツ王の《新ビツィカート・ポルカ》という、これと趣向の曲は、《ビツィカート・ポルカ》の続編としてその年に代曲されたもので、それは弟ヨーゼフへの追悼の曲ともいわれている。

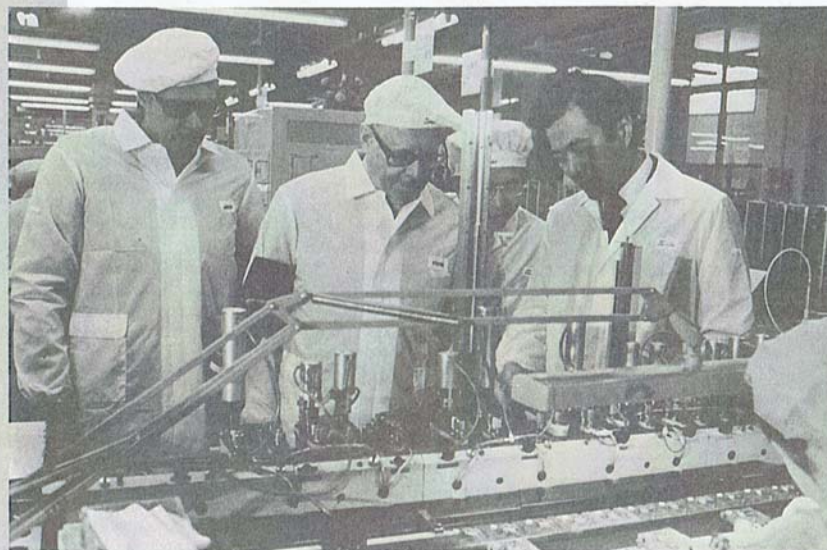
喜歌劇《こうもり》序曲（ヨハン・シュトラウス）

オーストリアの首都ウィーンの人口は、19世紀に急激に増大した。その住民の中には帝国領土内の異民族、つまりボヘミア人、モラヴィア人、ハンガリー人、セルビア人、イタリア人などもたくさん混っていた。コスモポリタン化したウィーンの市民は、ボヘミアのポルカ、ポーランドのマズルカ、ハンガリーのチャルダッシュなどをレントラー舞曲やウィнна・ワルツと同様に愛好し、それらすべてを同時に楽しめるウィーン風オペレッタに人気集中した。ワルツ王シュトラウスも《美しく青きドナウ》の4年後からオペレッタの創作に主力をそそいで、その第3作《こうもり》によってオペレッタ史上の不滅の金字塔を打ち建てた。

《こうもり》というのは、劇中の人物であるウィーンの公証人ファルケ博士のニックネームで、彼が考えた陽気な仇討ちがこの楽しいオペレッタの物語なのである。「序曲」は全曲中の見どころ開きどころの美しい旋律を束ねたもので、シャンパンの栓を抜く音を描写する3つの和音に始まり、「親しい仲」(Du und Du)の曲名で独立のワルツとしても知られる第2章のフィナーレの円舞曲《こうもりのワルツ》や第1章でロザリンドによって歌われる悲しげなメロディーその他が次つぎに姿を見せる。しかも形式的によく整っており、《ジプシー男爵》の序曲と双壁の名曲として、古今のオペラ＝オペレッタ序曲中に不動の位置を占めている。

トリッチ・トラッチ・ポルカ 作品214（ヨハン・シュトラウス）

《トリッチ・トラッチ》(Tritsch-Tratsch)とは「女性のおしゃべり、むだ話」などを意味するドイツの俗語 (Klatsch und Tratsch ともいう) である。ポルカ (Polka) は、1830年ごろに起こったボヘミア (チェコ) の農民舞曲だが、ワルツより少し遅れてウィーンをはじめヨーロッパ中で大流行した。このテンポの速い2拍子の舞曲はウィнна・ワルツよりは曲の長さがずっと短く、気分的にも快適なコントラストを持つため、ワルツと交互に演奏されることが多い。しかしポルカにも、その基本であるこの《トリッチ・トラッチ・ポルカ》のような急速調のもの (Schnell-Polka) のほかに、同じくテンポの速いガロップ風ポルカ (Polka quasi Galopp) や、ゆるやかなポルカ (Langsam-Polka)、あるいは同様のフランス風のポルカ (Polka-Française) と、ポーランド舞曲マズルカと合体した2拍子のポルカ・マズルカ (Polka-Mazurka) などの変種もあって、シュトラウス3兄弟はそれらもたくさん作曲している。





KARL BÖHM WIENER PHILHARMONIKER

Die Aufnahme in der NHK Hall
Tokyo 1975



92MG 0752/5
418 102-1